



Ⓛ

日本語は片言 募る不安

「对了（正解だ）」「你也試試看看（あなたもやってみて）」。8月26日、札幌市厚別区の市営もみじ台団地で1人暮らしの中沢榎子さん（80）は久しぶりに声を出して笑った。数年ぶりに会った中国出身の友人と、タブレット端末で四字熟語を当てるゲームに熱中。友人が持参した中国菓子「月餅」を食べながら、うれしそうに話した。「こんなに思い切り中国語を話したのはいつぶりかな」

中沢さんは1942年（昭和17年）、多くの日本人が入植していた中国東北地方（旧満州）の吉林省で



友人と中国語のゲームで遊ぶ中沢さん（左）。高齢で足腰が弱くなり、家にこもりがちな生活を送る
＝8月26日、札幌市厚別区

生まれ、終戦後に中国に取られたデイサービスは諦められ残された「残留孤児」だった。3歳で中国人の養父母に引き取られ、「生粋の中国人」だと思って育ってきた。養父母の他界後、自分分は日本人で、生き別れた実母が北見で暮らしていると知らされ、一時帰国を経て90年に中国人の夫、息子とともに永住帰国した。

当時48歳。日本語は札幌市手稲区にあった国の帰国者定着促進センターで勉強したが、平仮名やカタカナを覚えるのが精いっぱいだった。職を得た市内の工場では片言で意思疎通してきしたが、60歳で定年退職した後には日本語を話す機会が激減し、今は簡単なあいさつしかできなくなった。

夫が死去した8年ほど前から足腰を痛め、今はつえを手放せない。通院時は市の中国帰国者生活相談室から通訳を派遣してもらおうが、常に頼めるわけではなく、かかりつけ医に勧めら

た。時折来てくれる息子たちの苦勞を考えると、いずれは介護施設に入所せざるをえない。「具合が悪くなったら時に病状をきちんと伝えられるだろうか」。不安はそれだけではない。「施設で話し相手がいなくてひとりぼっちになったら寂しいだろうな」

◇ 1972年の日中国交正常化から29日で50年となる。これを機に日本政府は中国に取り残された残留邦人の調査や帰国支援を本格化させ、これまで約6700人が帰国した。苦難を乗り越えて帰国した1世、そしてその子や孫はいま日本でもどう暮らしているのか。その姿を追った。（報道センターの三島今日子が担当し、3回連載します）

29面に続く